

平安京右京六条三坊四町跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条三坊四町跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、新社屋建設に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

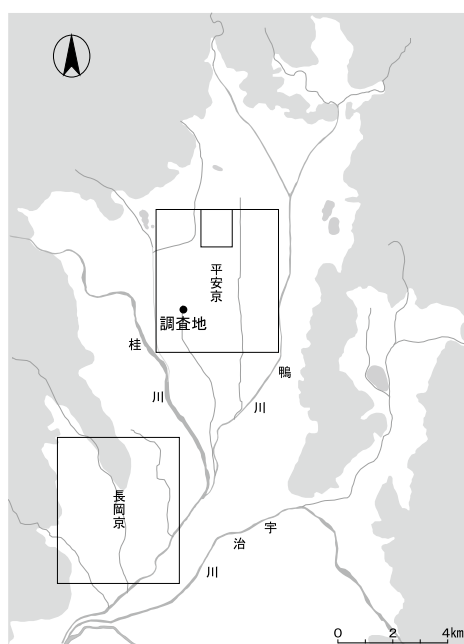
令和2年1月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡（京都市番号 19H139）
- 2 調査所在地 京都市右京区西院溝崎町21番地
- 3 委 託 者 ローム株式会社 総務部統括課長 山根慎太郎
- 4 調査期間 2019年8月5日～2019年9月24日
- 5 調査面積 約352㎡
- 6 調査担当者 西田倫子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西京極」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付した。
- 13 本書作成 西田倫子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経緯	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 9世紀前半の遺構	5
(3) 9世紀中頃の遺構	8
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	11
5. ま と め	12

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（西から）
		2	2区全景（西から）
図版2	遺構	1	建物1（西から）
		2	堀1・2（北から）
図版3	遺構	1	溝35と宇多小路築地推定ライン付近の江戸時代南北溝（北東から）
		2	溝35（南西から）
		3	土坑70（西から）
		4	落込61（北東から）

挿 図 目 次

図1	調査地点位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（北西から）	2
図4	作業状況（北西から）	2
図5	周辺調査位置図（1：5,000）	3
図6	土坑70実測図（1：40）	5
図7	落込61断面図（1：40）	5
図8	調査区北壁・東壁断面図（1：50）	6
図9	調査区平面図（1：150）	7
図10	建物1実測図（1：100）	9
図11	塀1・2実測図（1：100）	10
図12	溝35断面図（1：40）	10
図13	出土土器実測図（1：4）	11
図14	右京六条三坊四町の調査遺構配置図（1：800）	13

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	8
表3	遺物概要表	11

平安京右京六条三坊四町跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯 (図1)

本調査は、ローム株式会社の新社屋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査対象地は京都市右京区西院溝崎町21番地に所在し、平安京右京六条三坊四町跡の北西部に該当する。建設に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施したところ、平安時代の遺構・遺物が確認されたため、文化財保護課から原因者に対し発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を実施することとなった。

(2) 調査の経緯 (図1～4)

調査区は掘削土の仮置き場を確保する関係上、南（1区）と北（2区）の2区に分けて設定した（図1）。1区は東西31m、南北11m、2区は東西17m、南北8mのいずれも東西に長い長方形で

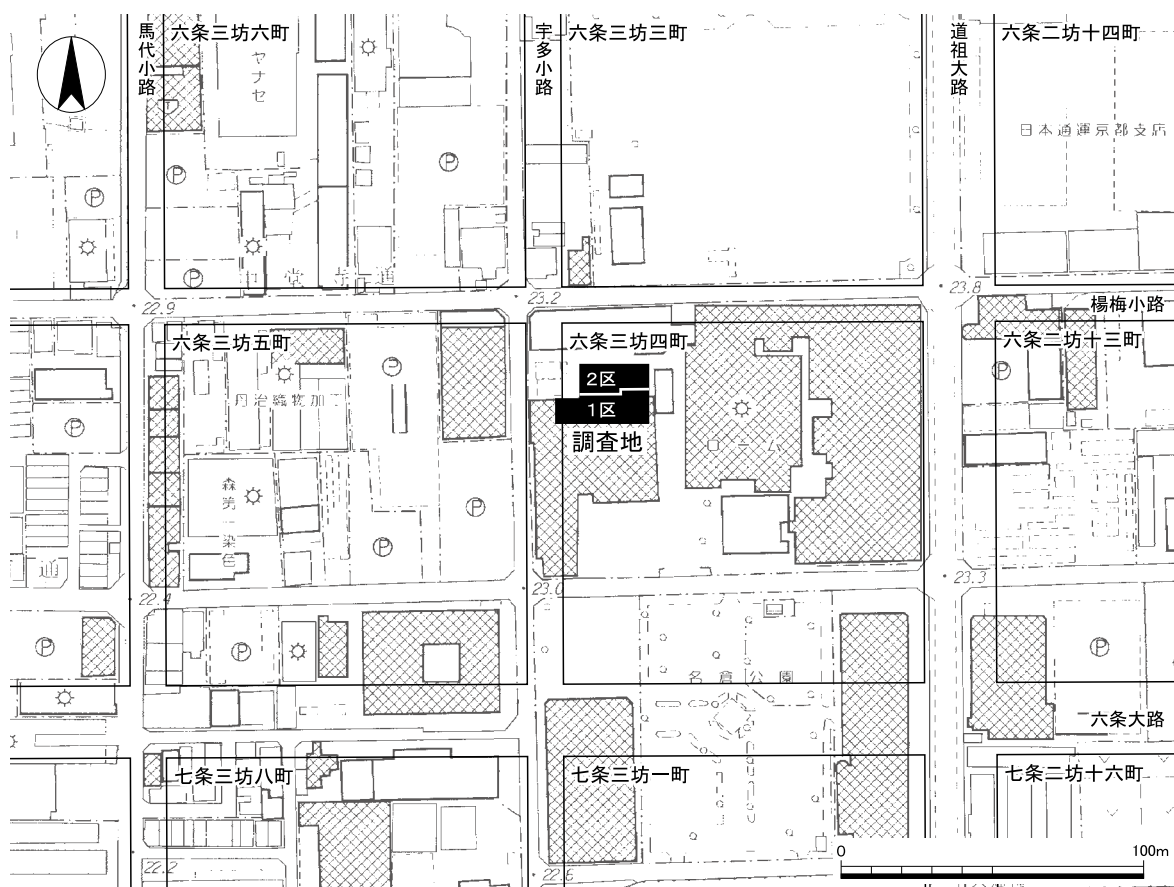


図1 調査地点位置図 (1:2,500)

あるが、建物基礎により区画されている。調査面積は352㎡である。2019年8月5日から調査を開始した。調査では、現代盛土と旧耕作土を重機により掘削し、検出した地山上面で調査を行った。検出した遺構は、人力で掘削し、図面作成・写真撮影などの記録作業を行った。

調査の結果、平安時代前期から中期にかけての建物、塀、土坑、落込、溝、柱穴列を検出し、宅地として利用されていることが明らかとなった。

調査後は埋め戻しを行わず、9月24日に全ての作業を終了した。

調査中は、文化財保護課による臨検を適宜受け、検証委員である龍谷大学の國下多美樹氏、同志社大学の浜中邦弘氏による検証を受けた。

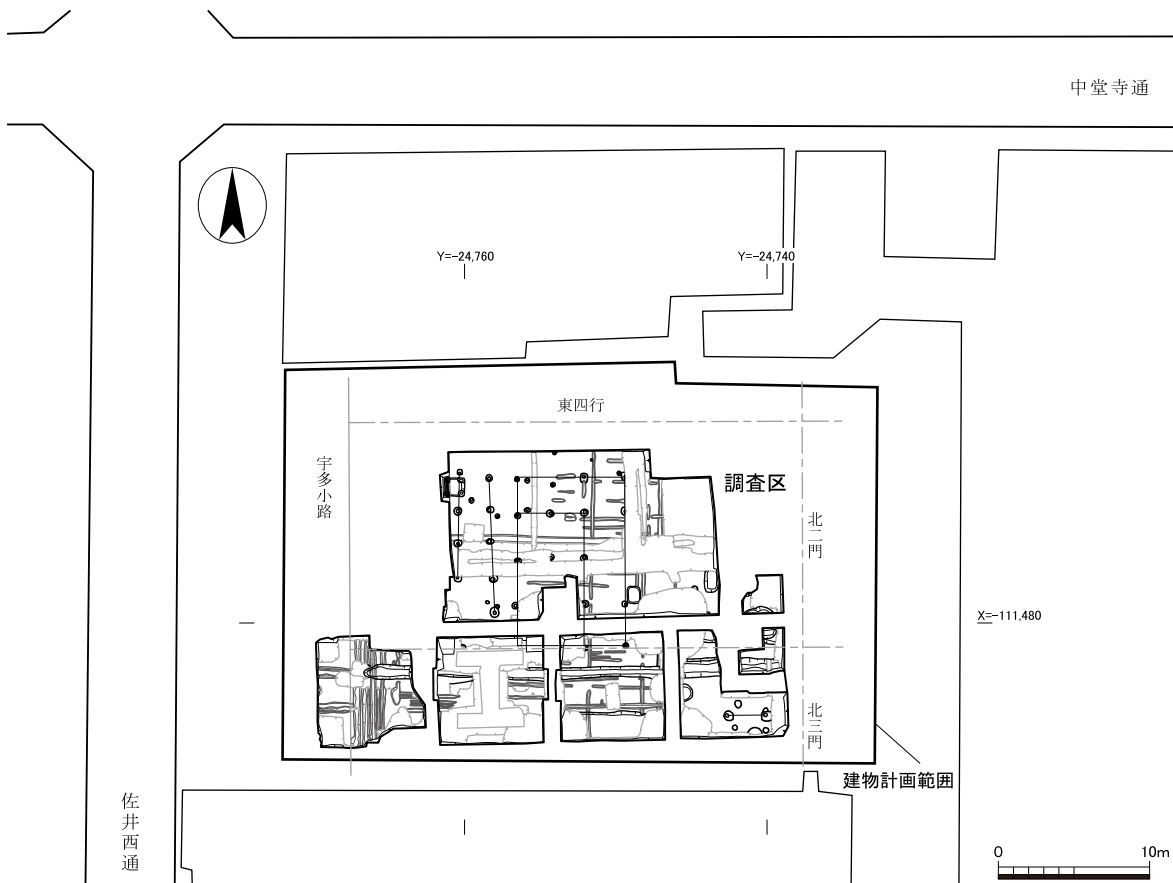


図2 調査区配置図（1：500）



図3 調査前全景（北西から）



図4 作業状況（北西から）

2. 位置と環境 (図5、表1)

当該地は京都盆地のほぼ中央に位置し、平安京右京六条三坊四町に相当する。北を楊梅小路、西を宇多小路、南を六条大路、東を道祖大路に囲まれる。この町の土地利用を示す史料は明らかではない。当該地の北西約850mには、淳和天皇の後院・淳和院が営まれ、これが西院と別称されたために、この地域を後に西院と呼ぶようになったとされる¹⁾。右京域は紙屋川をはじめとする小河川が多く存在し、扇状地帯と自然堤防帯が展開、洪水氾濫が頻発しやすい不安定な地域であった。調査地周辺も紙屋川の扇状地帯にあたる。これら小河川の洪水の氾濫をおさえるために9世紀前半以降に河川を増設し、平安京右京域で分流工事を行うなど治水事業を行っての土地利用が進められた。しかし、平安時代中期以降になるとその効果も一部で厳しくなり、紙屋川が氾濫したりした。また、桂川流域の旧河道に広がった低湿地の影響も関係してこの地域は衰退していった²⁾。

織豊期には豊臣秀吉により御土居が築造され、御土居内いわゆる洛中での本格的都市改造が行われる。一方、洛外にあたる西院では公家・寺社領地の替地が設けられ、周辺地域は農業が盛んとなり、近代にいたっている³⁾。

今回の調査地の東側では、発掘調査(図5-調査2~6)が行われており、四町域では9世紀前

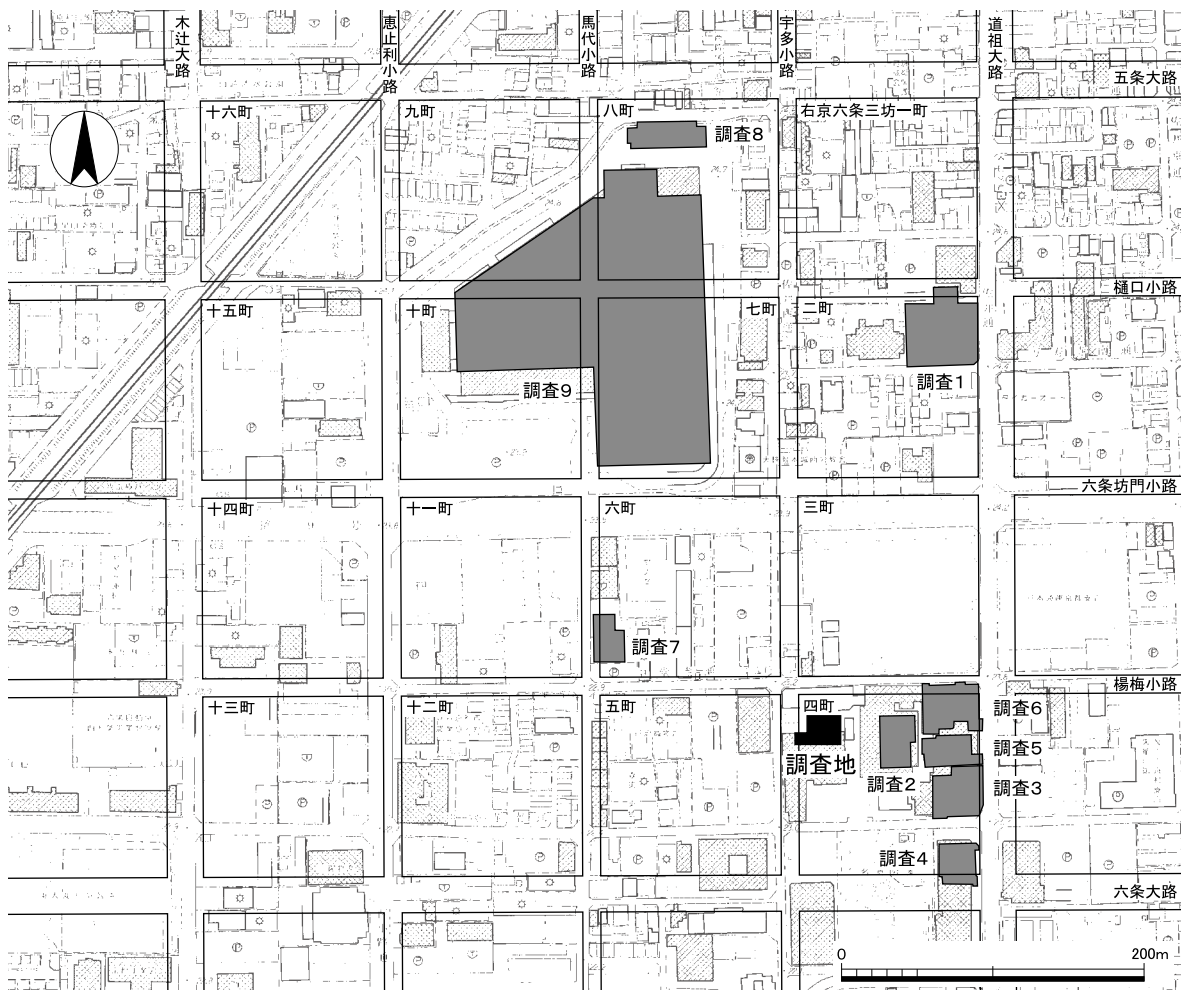


図5 周辺調査位置図 (1:5,000)

表1 周辺調査一覧表

番号	条 坊	調査年度	平安時代の遺構	その他の時代の遺構	文 献
1	右京六条三坊二町	平成15年度	平安時代前期：建物、井戸、土坑、樋口小路南側溝。	中世：南北溝。 近世～近代：耕作溝、土坑。	『平安京右京六条三坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
2	右京六条三坊四町	昭和56年度	平安時代前期～中期：建物、柵列、溝。		『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
3	右京六条三坊四町	昭和61年度	平安時代：建物、柵、溝、井戸、土坑。	古墳時代：流路、落込。	『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
4	右京六条三坊四町	平成元年度	平安時代：建物、柵列、土坑(土器埋納遺構)。	鎌倉時代以降：耕作溝。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
5	右京六条三坊四町	平成5年度	平安時代：建物、落込、道祖大路内溝。	中世以降：耕作溝。	『平安京右京六条三坊 ローム株式会社社屋新築に伴う調査』古代文化調査会 1998年
6	右京六条三坊四町	平成7年度	平安時代：建物、塀、楊梅小路路面高まり。	中世以降：耕作溝。	
7	右京六条三坊六町	平成16年度	平安時代前期：建物、井戸、馬代小路内溝。平安時代後期：建物、流路(馬代小路)。	中世以降：耕作溝。	『平安京右京六条三坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
8	右京六条三坊八町	平成2年度	平安時代前期～中期：建物、柵列。	古墳時代後期：土坑。 中世以降：耕作溝。	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
9	右京六条三坊七～十町	平成12・13年度	平安時代：建物、柵列、門、池、流路、木棺墓。	縄文時代：流路、土坑。 古墳時代：総柱建物、流路。 中世以降：建物、耕作溝。	『平安京右京六条三坊 平安京跡研究調査報告第20輯』財団法人古代学協会 2004年

半から10世紀前半にかけての掘立柱建物、井戸、町内道路、池が確認されている。また、四面庇建物と池が存在し、有力な階層の居住宅が存在したと考えられる。なお、道祖大路の側溝からは「佐」銘の墨書土器も出土している。

また、六町の調査（調査7）では、平安時代の掘立柱建物、井戸、流路化した馬代小路、中世の素掘り溝を検出しており、井戸からは人名が墨書された男女1組の人形が出土している。

さらに、七・八・九・十町では、大規模な発掘調査（調査9）が行われ、平安時代の流路、樋口小路・馬代小路に伴う条坊遺構、掘立柱建物、町内道路などが検出され、1町規模の宅地の存在が明らかとなった。遺物としては、「讃岐国苅田郡白米」などと書かれた木簡、人形や獣骨などの祭祀遺物が出土している。

註

- 1) 京都市編『京都の歴史』学芸書林 1968～1976年、『京都市の地名』平凡社 1979年
- 2) 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 日本文化財科学会 2001年
- 3) 註1に同じ

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8)

調査地の現地表面は、標高23m前後である。調査前まで旧社屋が建てられており、ほぼ平坦地であった。層序は、現地表面から厚さ5～45cmがコンクリートと現代盛土(北・東壁1層)である。その下層は、厚さ10～20cmの江戸時代以降の耕作土(北・東壁2～4層)、さらにその下層に基盤層である地山層(北壁7層・東壁14～16層)を確認した。

遺構はすべて地山面上で検出している。平安時代前期から中期の建物・堀・土坑・溝・落込などを検出した。また、江戸時代の遺物を含む耕作溝を調査区全体で確認している。

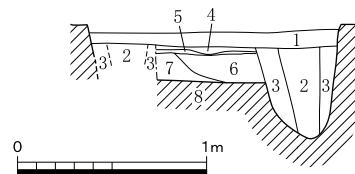
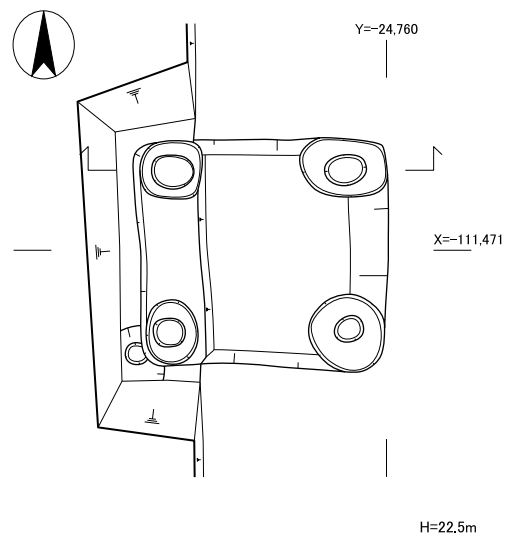
本報告では、遺構が両調査区にまたがるため、まとめて報告を行う。以下、時期の順に述べる。

(2) 9世紀前半の遺構 (図9、図版1)

土坑、落込を検出した。

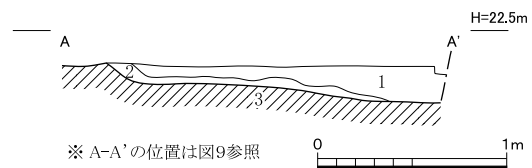
土坑70(図6、図版3) 調査区北側西端で検出した方形の土坑で、東西1.3m、南北1.2m、深さ0.28mを測る。土坑の四隅で柱穴を検出した。柱穴掘形は径0.3～0.4mの円形、深さは0.5mを測り、柱痕跡から推測される柱径は0.2mである。地山を一度0.24m程掘り込み、4～7層で0.18m程埋め戻した後に柱穴が掘られている。上面の黄褐色粘土(5層)は精緻で、床面が整えられている。床面上(4層)では、炭、土師器、黒色土器を検出した。遺構の性格は不明である。遺物は大半が4層から出土した。遺物は小片ばかりで磨滅も激しいが、概ね9世紀前半頃と考えられる。

落込61(図7、図版3) 調査区中央南端で検出した。検出幅は1.8m、深さは北側が0.1m、南側が0.2mで、全体的に南側へ傾斜する遺構である。自然の傾斜面であり、出土遺物から9世紀前半に埋められたと考えられる。



- 1 10YR3/2黒褐色 シルト 粘質 縮まる φ2cm大の礫・炭含
- 2 10YR3/2黒褐色 細砂～シルト 粘質
- 10YR4/4褐色細砂ブロック含
- 3 10YR3/2黒褐色 シルト 粘質 φ2cm大の礫・炭含
- 4 10YR3/3暗褐色 粗砂 φ3cm大の礫・土器・炭多量含
- 5 10YR4/2灰黄褐色 粘土
- 6 10YR3/3暗褐色 粗砂～シルト 粘質 φ4～5cm大の礫含
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂～シルト
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂(地山)

図6 土坑70実測図(1:40)



- 1 10YR4/2灰黄褐色 粗砂～細砂 φ3～4cm大の礫含
- 2 10YR3/3暗褐色 シルト φ3cm大の礫・土器・炭含
- 3 10YR3/2黒褐色 細砂～シルト 粘質(地山)

図7 落込61断面図(1:40)

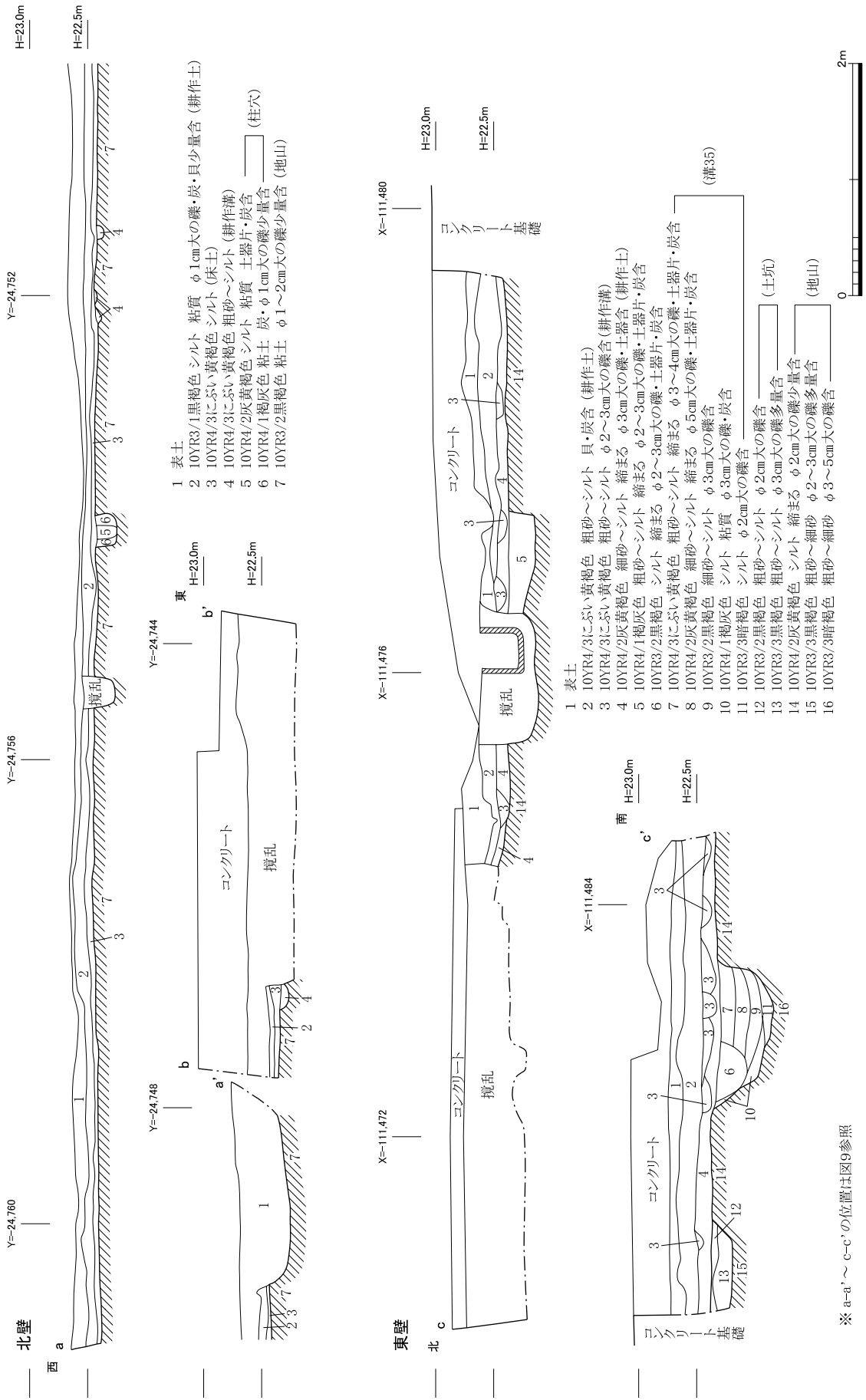
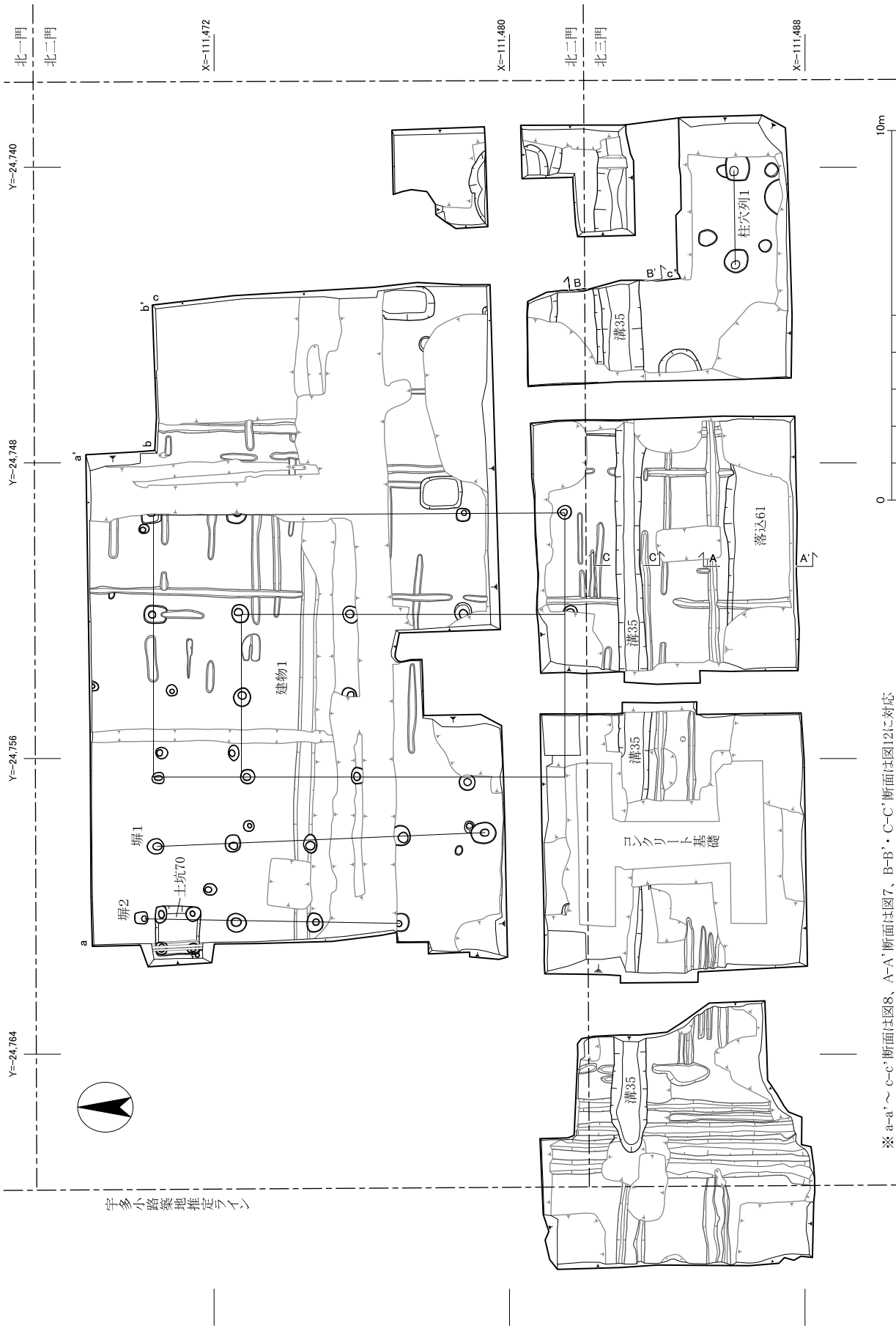


図8 調査区北壁・東壁断面図 (1 : 50)



宇多小路築地推定ライン

※ a-a' ~ c-c' 断面は図8、A-A' 断面は図7、B-B'・C-C' 断面は図12に対応

図9 調査区平面図 (1 : 150)

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
9世紀前半	土坑70、落込61	
9世紀中頃	建物1、塀1・2、溝35、柱穴列1	

(3) 9世紀中頃の遺構 (図9、図版1)

建物、塀、溝、柱穴列を検出した。

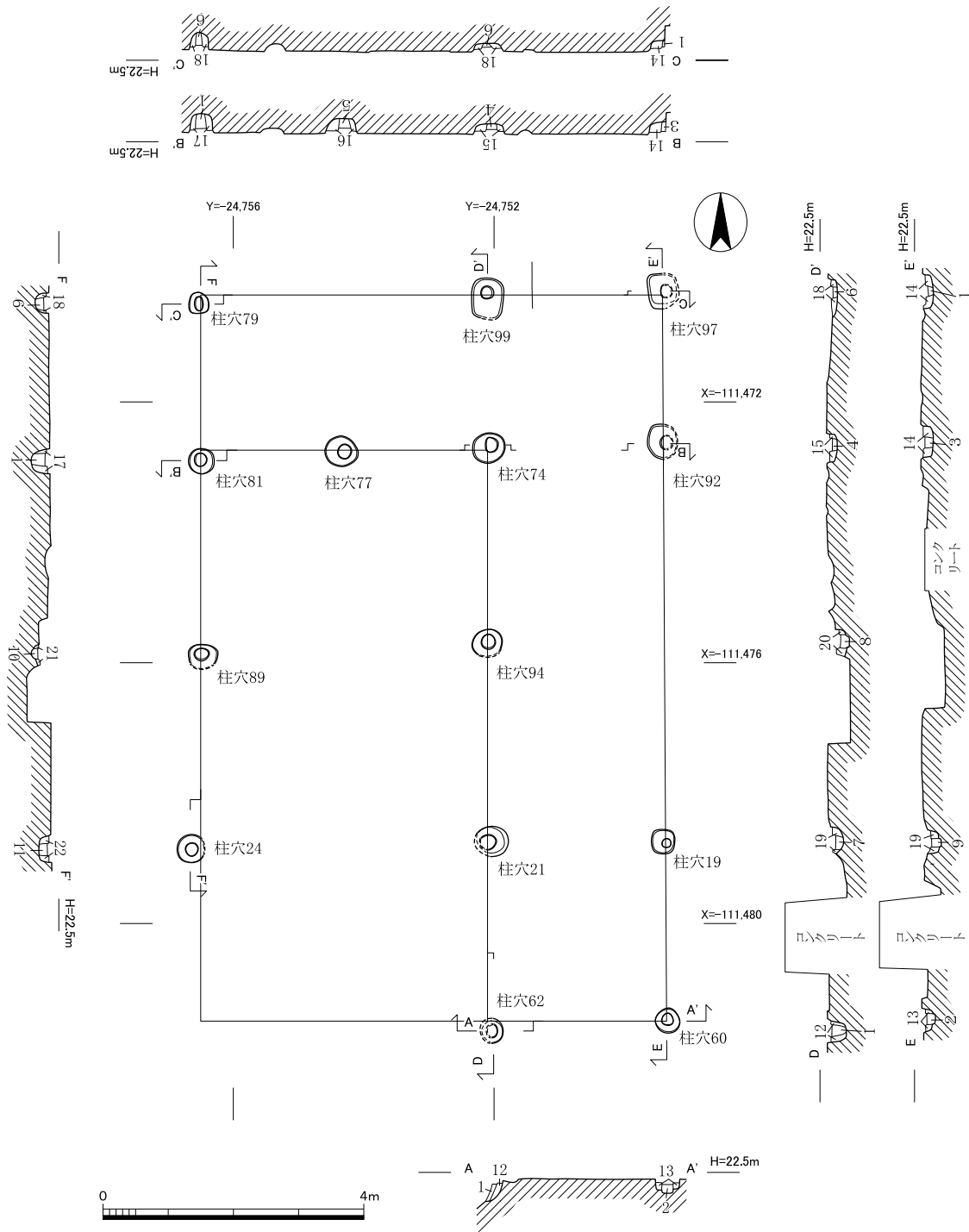
建物1 (図10、図版2) 調査区北側で検出した。身舎2間×3間に北と東に庇を持つ南北棟の掘立柱建物である。身舎柱間は、梁行が2.25m (7.5尺) 等間、桁行は北から3.0m (10尺)、3.0m (10尺)、2.7m (9尺)。庇の出は北側が2.4m (8尺)、東側が2.7m (9尺)。身舎の柱穴は、掘形が径0.5mの円形、深さは0.2～0.3mを測り、柱痕跡から推測される柱径は0.2mである。北庇・東庇の柱穴は、掘形が径0.3～0.5mの円形、深さは0.1～0.3mを測り、柱痕跡から推測される柱径は0.2mである。

塀1 (図11、図版2) 調査区西側で検出した南北方向の柱列である。4間分検出した。柱間は北から2.1m、2.1m、2.5m、2.2m。柱穴掘形は径0.5～0.6mの円形、深さは0.3～0.4mである。遺構方位が北に対してやや西に振れる。

塀2 (図11、図版2) 調査区西側で検出した南北方向の柱列である。3間分検出した。柱間は北から2.5m、2.15m、2.25mである。柱穴掘形は径0.3～0.5mの円形、深さは0.2～0.3mである。建物1と方位がそろふことから、建物1に伴う目隠し塀の可能性が推測される。

溝35 (図12、図版3) 調査区南側で検出した。幅0.6～1.3m、深さ0.27～0.54mを測る東西方向の溝である。調査区中央(C-C'地点)では深さ0.34m程と浅く、調査区東部(B-B'地点)では0.48mとやや深くなる。埋土は流水の痕跡がみられず、区画溝の可能性が考えられる。また、東四行北二門・三門の境界推定ライン近くに存在することから、門境の溝である可能性が指摘できる。調査区西端の宇多小路築地芯推定ラインより1m程東で溝は途切れる。

柱穴列1 調査区南東隅、溝35の南側で検出した東西方向の柱穴列である。1間分を検出し、柱間は2.55mである。柱穴掘形は径0.65mの隅丸方形と円形、深さは0.34m・0.39mである。東・南側は調査区外となり不明であるが、塀もしくは建物の一部の可能性がある。



- | | |
|--------------------------------------|--------------------------------|
| 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト 締まる | 12 10YR4/1褐灰色 粗砂～シルト |
| 2 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘質 土器片含 | 13 10YR3/1黒褐色粘土ブロック・φ2～3cm大の礫含 |
| 3 10YR5/2灰黄褐色 細砂～シルト 締まる 土器片・炭含 | 14 10YR4/1褐灰色 シルト 粘質 |
| 4 10YR4/2灰黄褐色 シルト 締まる φ0.5cm大の礫・土器片含 | 15 10YR4/3こぶい黄褐色 シルト |
| 5 10YR4/1褐灰色 シルト | 16 10YR4/2灰黄褐色 粗砂～シルト 粘質 |
| 6 10YR3/3暗褐色 シルト 締まる 小礫含 | 17 10YR4/1褐灰色 シルト 粘質 φ1cm大の礫含 |
| 7 10YR3/2黒褐色 シルト 粘質 φ5cm大の礫・炭含 | 18 10YR4/3こぶい黄褐色 細砂～シルト |
| 8 10YR3/2黒褐色 シルト 粘質 φ1cm大の礫含 | 19 10YR4/1褐灰色 シルト 粘質 φ5cm大の礫含 |
| 9 10YR3/2黒褐色 シルト 粘質 φ5cm大の礫・土器片含 | 20 10YR4/1褐灰色 細砂～シルト |
| 10 10YR3/2黒褐色 細砂～シルト 締まる | 21 10YR4/2灰黄褐色 細砂～シルト 締まる |
| 11 10YR3/2黒褐色 シルト 粘質 | 22 10YR4/1褐灰色 シルト 粘質 φ2cm大の礫含 |

図10 建物1実測図 (1:100)

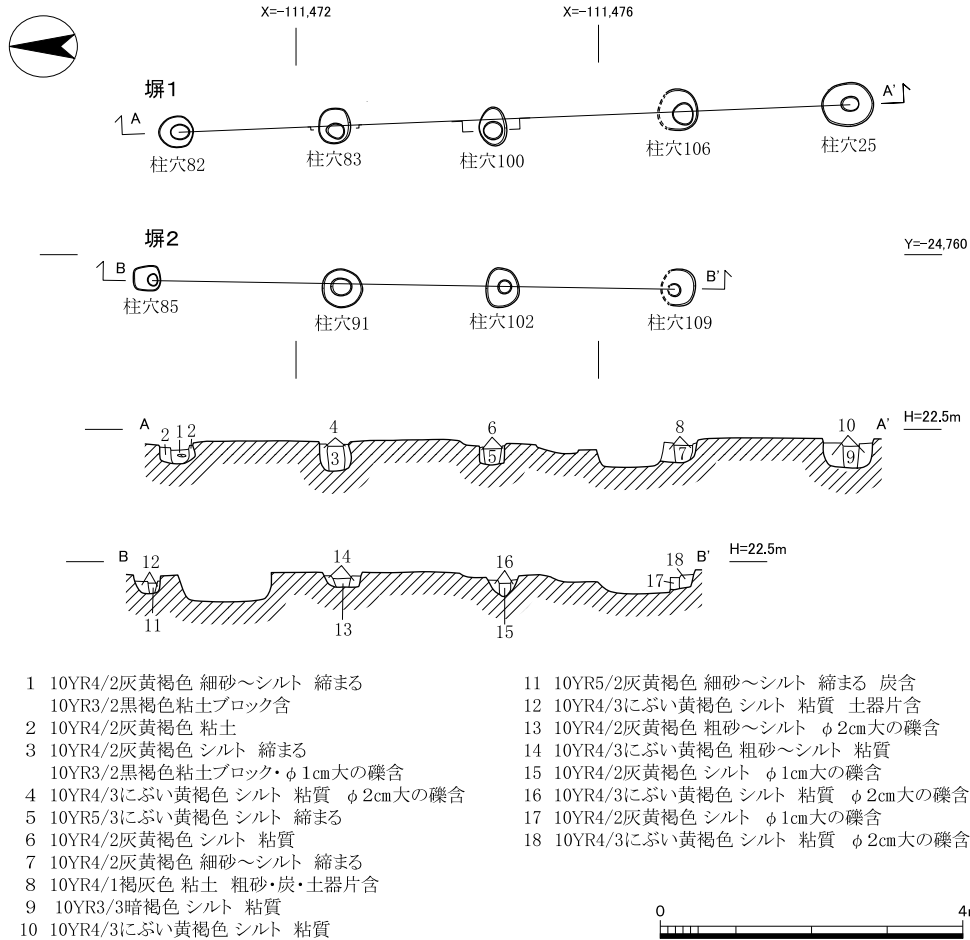
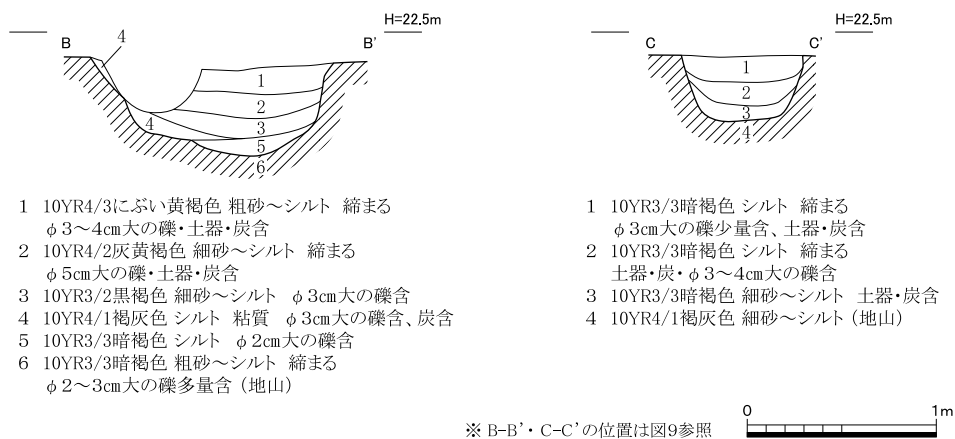


図11 塀1・2実測図 (1:100)



※ B-B'・C-C'の位置は図9参照

図12 溝35断面図 (1:40)

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表3)

調査では整理コンテナにして7箱の遺物が出土した。全体的に遺物の出土量は少なく、大部分が小破片であった。出土遺物には、土器類、瓦類がある。土器が大半を占める。遺物の時期は、主に9世紀前半から中頃である。

(2) 土器類 (図13)

土器類は平安時代前期のものが多く、土師器・須恵器・黒色土器が主で、緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器が少量みられる。まとめて出土しているのは、土坑70・落込61・溝35からである。土坑70の遺物は、小片のため図示できなかったが、9世紀前半頃のものである。

落込61出土土器 (1～6) 1・2は土師器の皿。外面は端部までヘラケズリする。内面は横ナデを施す。3は土師器の杯蓋。磨滅し調整不明の箇所が多いが、外面の一部にヘラミガキがみられる。4～6は須恵器。4は杯蓋。口径14.0cm、器高1.8cm。ロクロ成形でナデ調整。口縁端部は外側にわずかに開く。5は杯B。ロクロ成形でナデ調整。貼付高台である。やや軟質の焼成である。6は杯B。口径12.4cm、器高3.9cm。ロクロ成形でナデ調整。内面口縁部付近を強くナデる。貼付高台である。

溝35出土土器 (7～10) 7は土師器の皿。外面はヘラケズリ、内面は横ナデを施す。口縁端部が内側に小さく屈曲する。8は土師器の杯。体部外面はケズリであるが凹凸が残る。9は須恵器の杯B。口径14cm、器高4.8cm。口縁部がやや外反する。10は灰釉陶器の皿。外面はロクロナデ調整する。内面は灰を振りかけて施釉されている。貼付高台。

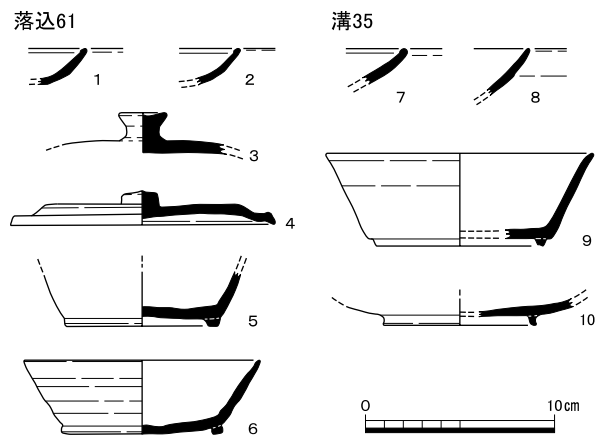


図13 出土土器実測図 (1 : 4)

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、瓦		土師器5点、須恵器4点、灰釉陶器1点		
中世以降	土師器、施釉陶器、磁器				
合計		8箱	10点 (1箱)	0箱	7箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

5. まとめ (図14)

調査対象地は平安京右京六条三坊四町跡の北西隅に該当する。今回の調査で検出した主な遺構には、9世紀前半の土坑・落込、9世紀中頃の建物・堀・溝で構成される宅地の一部がある。今回の調査成果を時代ごとにまとめ、四町の周辺調査成果をあわせて宅地の変遷について考える。

9世紀前半の遺構 土坑70や落込61からなる。落込61は9世紀前半の遺物を含み、当地を利用する目的で自然地形を埋め整地を行ったと考えられる。周辺に建物跡などは検出できなかったが、土坑70は方形の土坑で四隅に柱穴を持つ遺構であり、性格は定かではないが宅地内の何らかの付属施設であったことは間違いない。9世紀前半には宅地規模など不明な点も多いが、当地域が居住空間として利用されていたことが想定される。

9世紀中頃の遺構 建物1、堀1・2、溝35からなる。溝35は北二門と三門の境に位置し、この頃、この溝により土地が分割され、南北で別々の宅地として利用されるようになったと想定される。

溝35の北側には建物1が存在する。この建物は身舎の桁行柱間が3.0m(10尺)もあり、柱間だけをみれば大規模な建物を連想させるが、柱穴掘形が径0.5～0.6mと小規模であり、梁行は2.25m(7.5尺)程度で、桁行の柱間にもばらつきがあることから、建物構造としては簡易なものと考えられる。また、この建物は南北棟の建物であることから、宅地の主屋ではなく、副屋の可能性が想定される¹⁾。

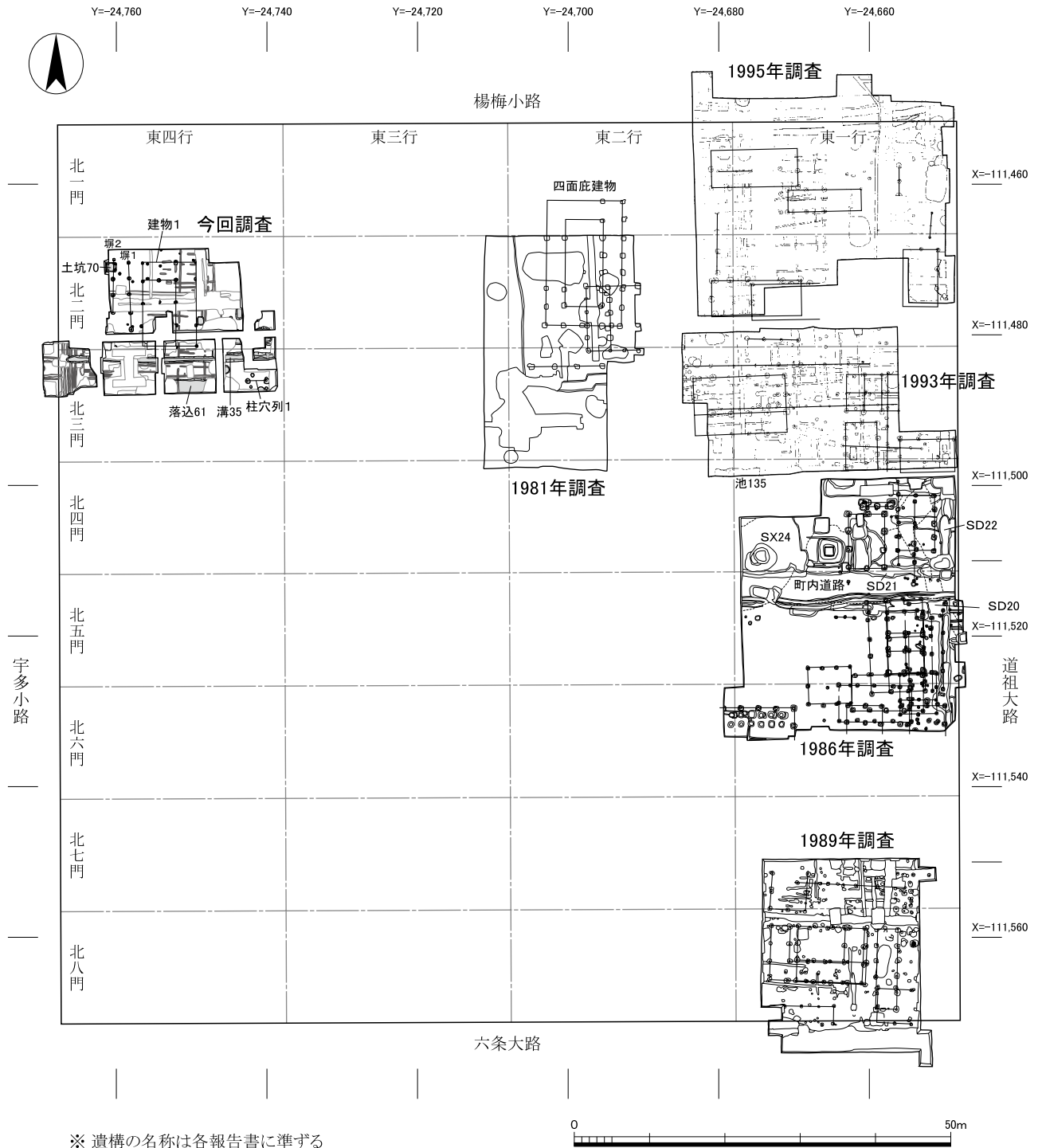
溝35より北側の宅地規模は、溝35に続く溝が1981年度調査で検出されておらず、東三行内で収まると想定されること、建物1が南北棟であり、主屋ではなく副屋と想定され、南は溝35が存在し建物が北西へしか展開できず、今回の調査地の北または北西部に主屋が存在すると想定でき、東三・四行北一・二門にわたる1/8町の可能性が考えられる。

宅地の西側に接する宇多小路との境については、特に道路側溝や柵などの区画施設はみられなかったが、築地芯推定ラインの東側で江戸時代の幅0.5mの南北溝を検出しており、時代は下るものの小路との境を踏襲している可能性も考えられる。

また、今回の調査で出土した土器から、各遺構は9世紀中頃には廃絶することや、それ以降の遺物がほとんど見られないことから、右京の衰退する10世紀をまたずに当該地周辺では宅地利用が行われなくなった可能性が考えられる。

四町の宅地の変遷 周辺調査では、9世紀初頭から後半の遺構を検出している。1986年度の調査では、多くの柱穴群を検出しており、その重複関係から9世紀の初頭から後半までの間に5時期の変遷を持つ可能性を指摘している。宅地規模を考える上で特に注目すべき成果は、調査区中央に通る幅約3mの町内道路と両側溝(SD20・21)、これらの遺構が廃絶した後に造られた池(SX24)の存在である²⁾。池の遺構は1993年の調査でも南端で池135を検出している³⁾。これらの遺構や1981年の調査で検出した南北棟の四面庇の建物の存在から、9世紀初頭には東西道路で南北に分断された宅地が存在し、その後大規模な宅地が展開したと推測されている⁴⁾。各建物の時期は出土遺物が

少なく確定が難しいが、町内道路の両側溝からは9世紀初頭の土器が、池からは9世紀後半の土器が出土しており、9世紀後半の段階では池を持つ大規模な宅地が広がっていたと考えられる。今回の調査成果では前述のとおり9世紀中頃に各遺構が廃絶しており、今回検出した建物1からなる宅地は9世紀後半には存在せず、東側で展開する大規模宅地に取り込まれていった可能性も考えられる。しかし、これらの宅地規模の変遷はさらなる検証も必要であり、今後の周辺における意識的な調査が必要である。



※ 遺構の名称は各報告書に準ずる

図14 右京六条三坊四町の調査遺構配置図 (1 : 800)

註

- 1) 網 伸也「平安時代初期の大規模宅地造成について」『研究紀要 第1号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
南 孝雄「平安京掘立柱建物の特性 ～庇付き建物の展開～」同上
- 2) 平尾政幸・梅川光隆「平安京右京六条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 3) 家崎孝治・梅川光隆『平安京右京六条三坊 ローム株式会社社屋新築に伴う調査』古代文化調査会 1998年
- 4) 堀内明博「第3章 平安京右京六条三坊」『日本古代都市史研究－古代王権の展開と変容－』思文閣出版 2009年

圖 版



1 1区全景（西から）



2 2区全景（西から）



1 建物1 (西から)



2 塀1・2 (北から)



1 溝35と宇多小路築地推定ライン付近の江戸時代南北溝（北東から）



2 溝35（南西から）



3 土坑70（西から）



4 落込61（北東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうさんぼうよんちょうあと							
書名	平安京右京六条三坊四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2019-8							
編著者名	西田倫子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2020年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さいいんみぞぎきょう 西院溝崎町 21番地	26100	1	34度 59分 41秒	135度 43分 44秒	2019年8月 5日～2019 年9月24日	約352㎡	会社施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	平安時代前期	土坑、落込、建物、 塀、溝、柱穴列	土師器、黒色土器、須 恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器、輸入磁器、瓦		平安時代前期の建 物と宅地の区画施 設を確認した。		
		中世以降		土師器、施釉陶器、磁 器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-8

平安京右京六条三坊四町跡

発行日 2020年1月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961